宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 26番
定価一年 送料共500円

中津宮春の大祭

四月十五日、十六日（旧暦三月十四、十五日）に宗像大社沖津宮、中津宮の春季大祭が厳粛に斎行された。

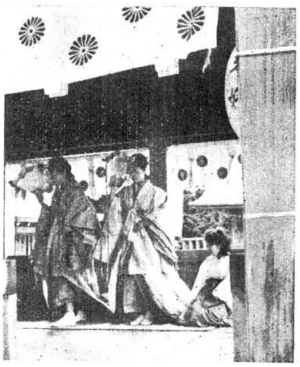
中津宮の祭儀はすべて旧暦で行われ氏子の大半は漁師で、当日は漁止めの上、全村あげてのお祭りで旧暦が大変に重んぜられている。前日の十五日は宵宮祭で、午后三時に大島北端の沖津宮遥拝所で、全五時に中津宮本殿に於て、それぞれ行なわれた。

とりわけ遥拝所に於ける沖津宮祭は、黄一色の菜ノ花畑をよぎり枝もたわゝな夏柑の山畑を過ぎ、玄海灘に北面する断崖上の祭典で誠に雄大且壮絶、しばし息を呑むの感があった。

本大祭の十六日は昨夜来の悪風で天候もあやぶまれたが、前日に増しての好天となった。

早朝より、献魚菜持参の村人と諸準備に尽力の惣代の方々によって社頭は賑って来た。

午前九時半沖津宮大祭が遥拝所で、御嶽神社祭が御神体山である御嶽山上でそれぞれ行なわれた。御嶽神社は漁業を専業とする大島村民の中で農耕に従事する方々の信仰を集めている。



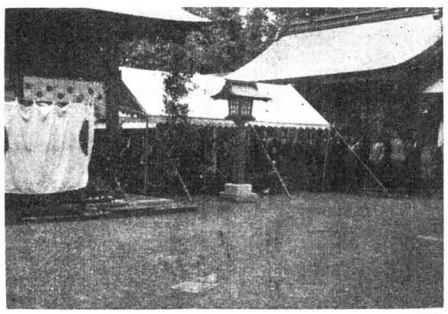
午前十一時、中津宮大祭が行われたが、折しも数日間に渡って咲き競った桜もようやく散り初めた参道を参拝の人々が花を愛でつゝ定刻に大勢参列した。

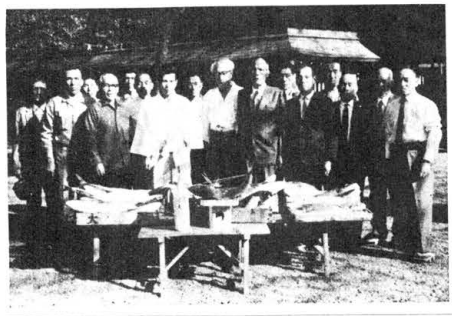
久保宮司の祝詞奏上の後、巫女の浦安ノ舞が行なわれ、振る鈴の音、大鼓、笛の音共に神域の森にこだまし、厳粛に行なわれた。

例年の事ながら当社の春秋の大祭には、数多くの献魚菜が奉られるが本年は特にその数、机代の台上溢れるばかりで、如何に村人達が、五穀の豊穣、漁業繁栄を祈り全村あげて心より祭典に奉仕して居るかが窺われる。

午后は、日本民謡協会香住ケ丘支部の御婦人方による民謡と舞踊が神賑行事として奉納され、交えて地元の人達による余興が飛出し、平常は静寂な境内も恰もお神楽の天宮岩戸開きの幕、八百萬の神々がどっと笑われたように終日なごやかに続いた。

長い冬の漁場でのきびしい生活、寒風吹きさぶ冬の畑仕事。ようやくにして迎えた春、一時に草木は息吹しその生命を発揮するとき、神に祈る村人、本当に氏子の生活に生きているお祭が、素朴ではあるが、この沖津宮、中津宮の祭典なのであるまいか。来る秋の収穫を心より祈念する次第である。





写真は
上、浦安舞
中、中津宮社頭
下、献魚と共に

宗像大社御用達
祭具、装束
結婚式場用品
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 九三七二番 八八六九番
振替口座京都一五八九一番

沖津宮現地大祭参拝について

来る五月二十七日沖ノ島御鎮座宗像大社沖津宮に於て、日本海海戦六〇周年記念日をトして国家鎮護祈念の現地大祭並びに沖津宮御改築奉告の正遷座大祭を斎行致します。

尚御参拝の方は左記事項を充分お含み置きの上御参拝下さいますようお願い申上げます。

記

一、参拝者には沖津宮奉賛会費として一人につき、一口五百円以上の御寄附をお願い致します。

一、宿泊、食事の御世話は致し兼ねますので、あらかじめ御準備下さるよう御願い申し上げます。

一、遊山、遊楽を目的とし、釣具等持参して便乗することは固く禁止致します。若し違反者があれば、乗船の際お断り致します。

参拝の心得は別に指示致します。

一、申込み要項

1、参拝御希望の方は五月十五日迄、宗像大社社務本局に住所、氏名、職業、年令を明記して申込み下さい。

2、乗船者数に制限がありますので人員超過の際は謹し消し致します。

論説　宗教の衰退

高度に機械化され経済化された大衆化された現代生活は、同時に高度の人間性表現の理想化を見たかと言えばそれはむしろ逆現象を呈してきたと言わざるを得ない。その逆現象の中に特に挙げられるのが、青少年の犯罪強暴化と、一般社会人の精神生活の混迷錯乱化である。機械文明が道義を駆逐したことに主因があると指摘されるが、文明をして道義を喰い荒させた責任は、政治と教育が負わなくてはならない。宗教は埒外か、否その根源的な窮極の責任は、宗教自体の衰退にある。

科学の進歩が現代社会を極度に機械化したため、科学的思考が神を抹殺したと説く者もあるが、神は抹殺されたのではない。光芒を阻まれているのである。宗教が衰弱化し、その掲げる神性的表現力を失ったまでである。人間の持つ主観性が機械化大衆化均一化によって抑圧され、科学的思考は精神生活に迷蒙を誘引し、それが反社会的になり自己喪失的になったのが、青少年の犯罪激増を頂点とする現代生活の異状現象である。機械文明が道義を駆逐したのは科学的思考が、社寺より観光株式化され文化財視され、結婚式屋葬式屋の繁栄策が先行独走して、堂守りはあれど道を教える神主僧侶は不在の観を呈している。宗教人不在の場所に生きた宗教活動はない。

識者の批判論の中によく衝かれる言葉は、宗教の衰退は優秀な宗教人が減少し、適器の資質を持つ後継者が生れないことにあると云う。現代その指導的立場にある者の無力のみでなく、複雑な社会生活の中に置かれている社寺の経済的その他の事情が、良質の後続出現を阻んでいる点も見逃せない。

先日或る寺院出身の青年から次のような意見を聴いた。

「私は一昨年大学を出て以来商事会社に勤めているが、父は長男だから寺に残った跡を継いでくれと切望していた。父は敬愛する、育った寺にも愛着を持つが、住転に何の魅力も感じない。父の言葉を借れば仏は私を生んだ、そして仏は私の人生を大切にすることを教えている。私自身が志望する道を歩むことが、私の人生を大切にすることであり仏の教に適った生き方だと考える。一人の弟が今大学に在学中ですが、これも父の転業は継がない、親は大切にしたいが碧式屋は二免たと言っております。宗教に血縁は無用です」と。

宗教人の家に生れた子弟の故を以って、終身的使命観を求めても解決は出来ないであろう。家庭的転業的な必要からこれを強いれば、徒らに父祖の精神を生活の具にする不信の転業者を作るのみである。この宗教人の悩みは自身が信仰の本質を逸脱しているところに始まり、便宜主義を捨てゝ内省による解決の外はあるまい。

宗教史上に於ける一宗の興隆は偉大なる宗教人によって実現した。決して血縁や家門の所産ではなかった。現代は先ず宗教が救済されねばならないと云うが、これを救済する者も宗教人自身であろう。それは単に父祖の家転を継承するというだけの必要から生れた宗教人には期待し難い。建造物を維持、行事を続行するために、転業的に訓練しただけでは大宗教家など出現しそうにはない。

まさに現代の宗教はコペルニクス的転回が必要となっている。この社会相に直面する宗教人は、観光化文化財化によって形体を経営する皮相な転業意識のみに泥まず、大きく空間を凝視する信仰司掌者としての反省を持たねばならぬ時機に起っている。現代人を納得せしめる宗教を担うために、形而下の経営面と同時にもっと空間の映像を発見することに努めねばならない。

科学は現代生活の機械化経済化を助長促進するために、尚一層高度の発展を遂げるであろう。そして苦悩や矛盾も社会のあらゆる面に増大してゆくであろう。その結果科学的思考によってのみ解決出来ないことを知れば、神を捜索する主観性を自覚するに至る。神を捜索するには宗教の掲げる標燈はあまりに暗い。その光の暗さこそ宗教人の無力を語っているのではないか。背嚢を貫く反省希求の矢は厳しいものである。

神に衰弱も滅亡もない。その神性（仏性）を無力にしたものが宗教である。宗教の本来の使命たる正しく真実に生きる道を説く力を持たなくなったのが宗教人であると、結論づけられる。

神仏は社寺にあっても、これを説く使徒は不在である。宗教人が使徒の本分を離れて、自己保存の職業生活に堕している。極論すれば伝承信仰形骸を擁して、自己奉仕の営業的転回を来したのである。

阿蒙少言

ここは歯科医の待合室「新幹線は速い、富士山が時速二百粁で飛んで行った」東京見物にでも出かけたらしい秀老が、数字をあげて得意の演説。入れ歯修繕の逐運は煙に巻かれて感嘆しきり。科学と迷信の境目がわからぬような話が、存外楽しいらしい。次は学生「アパートの住人とバスの乗客は底が知れてるヨ、おえら方はどちらにも用がない」長年バスや、電車で通勤する自髪頭は、勿論えらくない哺乳動物に属する。ところで学生よ、バスに無縁の高級車族に憧れるもよいが、飯の種にだけする勉学なら、ただの投資であり高級車に乗って後失望の日があろう。○花は注文通り咲いて、黙って散った「人間五十年化転のうちにくらべれば、夢幻の如くなり」舞扇を投げるや、一散に桶狭間に駆けた信長。くよく脚下の事家になすむまい、日々生れかわれと乱世の英傑は叱咤している。○信長と言えば、秀吉を思う。秀吉は母を大切にした。古今東西優れた人物は親の恩を知り、孝養を怠らなかった。今も各方面の尊敬すべき人々は大抵孝行者である。孝行の文字は廃れるとも、その美徳は人間永遠の真理を包んでいる。○恩義の先人を吊うのも美しい人情の現れだが、追悼をダシにして同好酒盃の集りには感心しないものがある。過日生前悪い事をして酬気を残した或る宗教人の慰霊祭があった。極刑に処せられた悪党でも、その縁者が法要を営むことも、その縁者が法要をよかろう。ただ酒席の頭数を増す必要から、何等関りのない者への案内状は、弟霊りたい。○神社仏閣の堂守は健在、求道者は絶えなんとする。汝は求道か、いや老境いまだにただの堂守り、全く面目次第もありません。

（白雲）

第四十六回　宗像大社献詠歌会詠草

四月四日　於社務所詠草到着順

神湊　隣船　俊
行く路の川土手長し柳水の流れも春の足音

勝浦浜　永島　文子
何となく心ほぐゝ木の芽雨歌友の便りにバッグ出来しと

多礼　藤崎保五郎
病みて後子をもつ親の幸せを思へば涙しじにはふりぬ

福間　井原　元彦
愛さばかりは人に判らじ
翳愛と言はれてもよしこの孫の可

陵厳寺　真鍋　万三
「アパートの住人とバスの乗客は底が知れてるヨ、おえら方はどちらにも用がない」長年バスや、電車で通勤する自髪頭は、勿論えらくない哺乳動物に属する。ところで学生よ、バスに無縁の高級車族に憧れるもよいが、飯の種にだけする勉学なら、ただの投資であり高級車に乗って後失望の日があろう。○花は注文通り咲いて、黙って散った「人間五十年化転のうちにくらべれば、夢幻の如くなり」舞扇を投げるや、一散に桶狭間に駆けた信長。くよく脚下の事家になすむまい、日々生れかわれと乱世の英傑は叱咤している。○信長と言えば、秀吉を思う。秀吉は母を大切にした。古今東西優れた人物は親の恩を知り、孝養を怠らなかった。今も各方面の尊敬すべき人々は大抵孝行者である。孝行の文字は廃れるとも、その美徳は人間永遠の真理を包んでいる。○恩義の先人を吊うのも美しい人情の現れだが、追悼をダシにして同好酒盃の集りには感心しないものがある。過日生前悪い事をして酬気を残した或る宗教人の慰霊祭があった。極刑に処せられた悪党でも、その縁者が法要を営むことも、その縁者が法要をよかろう。ただ酒席の頭数を増す必要から、何等関りのない者への案内状は、弟霊りたい。○神社仏閣の堂守は健在、求道者は絶えなんとする。汝は求道か、いや老境いまだにただの堂守り、全く面目次第もありません。

（白雲）

飯塚　萩本　夕照
一切のものみなかうしみ社の御手洗の水湧きてすがしき

福岡　高橋　昇
芸の虫艱苦に堪へて鬼となる鎮し卒後の世の神

田島　小野　迪夫
うとまるときめてかくれし末の子を春昼の庭に呼びあぐねたり

朝町　井上陽之助
梅の花に帽子かぶらせ子等をふぶまら「梅ぼし」ようくひすも笑む

津屋崎　麦野　時雄
いつまでも若さたもてうつし世の不老長寿のさきがけとなれ

戸畑　田中ハッセ
松前のすしをみやげの三人の子帯ほどく間におほかた食べぬ

コロラド浦野　薫
アメリカの家に住まへば満月も知らで月越す事もありけり

村山田　吉田佐一郎
畑を打つ孫の作業や雑なしわれ鍬とりて畝形を教ふ

厚狭　篠田　南洞
故里の釣川べりに柳朋え撃げる牛を追へば啼くなり

和布刈　永島　まち
和歌の浦片男の波のなつかしくここにもよせよ勝浦の磯（亡夫一周忌）

宮田　片山　一
境内の窪みに溜る雨水の汚なき水を掬の来て喜ぶ

陵厳寺　真鍋　万三
八十八年々輪重ね此の古木でえ木なくして庭を守りゐ

宮田　片山　朝子
一切のものみなかうしみ社の御手洗の水湧きてすがしき

福岡　高橋　昇
芸の虫艱苦に堪へて鬼となる鎮し卒後の世の神

田島　小野　迪夫
うとまるときめてかくれし末の子を春昼の庭に呼びあぐねたり

朝町　井上陽之助
梅の花に帽子かぶらせ子等をふぶまら「梅ぼし」ようくひすも笑む

津屋崎　麦野　時雄
いつまでも若さたもてうつし世の不老長寿のさきがけとなれ

戸畑　田中ハッセ
松前のすしをみやげの三人の子帯ほどく間におほかた食べぬ

コロラド浦野　薫
アメリカの家に住まへば満月も知らで月越す事もありけり

宮田　北原きみ子
行きすりに声かけられてふりむけば分科会にて討議せし高校生

吉武　白木うめの
一時を山肌染めし夕映えに今植つる苗木黒々と立つ

東郷　藤崎　辰子
遠き日の乗馬姿をながめつゝ停年後のことなど語り合ひける

戸畑　伊規須ゆき
綱別（嬬恋郡）の駅家は馬が五疋にて太宰府へ運つ公道なりし

東郷　小野角次郎
雛人形並べ姫子秩の部屋に揺れて姿美し

東郷　小野　花居
うらゝ日の彼岸に家族打つれて納骨堂に一日過しぬ

吉武　原田　松代
久々に帰りし孫等の打揃ひ話の中に吾も加はる

吉武　原田　リノ
人も世も変れど変らぬ鐘の音の余韻は遠く滑み渡りゆく（観世音寺鐘）

大濠　江崎　琴子
ただよひし白鳥のかげ今はなしこころなの人のすさび悲しも

宮田　片山　朝子
伸びて行くための別離と終日を天阪に発つ子の荷整ふる

勝浦　永島　計七
スポーツニュース手にして立つる学生の健康美にか車内明るし

江口　辻野　開造
採用の知らせを受けし書留に孫の瞳はれ〳〵と見ゆ

内浦　長畑　房江
仰臥する手にひもを引き高窓のカーテンをしぼる朝の楽しび

門司　永島　哲夫
傷負ひつゝ且つ負はせつゝいさかへる吾をなだむる春の灯のいろ

筑邦　津留崎初子
そのかみの槐勢偲ぶよすがとかの石垣にこの桜田門に

吉留　山下しづえ
宿直をまどろむ吾に目覚めよと小寿鶏鳴けり春展く朝

宮田　北原きみ子
行きすりに声かけられてふりむけば分科会にて討議せし高校生

吉武　白木うめの
一時を山肌染めし夕映えに今植つる苗木黒々と立つ

東郷　藤崎　辰子
遠き日の乗馬姿をながめつゝ停年後のことなど語り合ひける

戸畑　伊規須ゆき
綱別（嬬恋郡）の駅家は馬が五疋にて太宰府へ運つ公道なりし

東郷　小野角次郎
雛人形並べ姫子秩の部屋に揺れて姿美し

東郷　小野　花居
うらゝ日の彼岸に家族打つれて納骨堂に一日過しぬ

吉武　原田　松代
久々に帰りし孫等の打揃ひ話の中に吾も加はる

吉武　原田　リノ
人も世も変れど変らぬ鐘の音の余韻は遠く滑み渡りゆく（観世音寺鐘）

大濠　江崎　琴子
ただよひし白鳥のかげ今はなしこころなの人のすさび悲しも

宮田　片山　朝子
伸びて行くための別離と終日を天阪に発つ子の荷整ふる

勝浦　永島　計七
スポーツニュース手にして立つる学生の健康美にか車内明るし

江口　辻野　開造
採用の知らせを受けし書留に孫の瞳はれ〳〵と見ゆ

境内整備工事進む

当社新年度の事業計画について既報の通り明らかにされたが、就中、重要案件の一つであった心字池埋立境内駐車場拡張計画が実行に移され、現在着々と進行している。

これは我国の自動車産業の発展とオーナーの増加により、交通安全の御祈願も又急上昇を辿り、このまゝでは駐車場が狭隘となる事は必至と見られその対策が考えられていたが、他に求める場所がないので、現在、どぶ池となって蚊や蚊の温床となっている心字池の半分を埋立て、又、酒の神として各地酒造家から厚い信仰を寨めている松尾神社の築山をくずして心字池と一帯にして広場にすると云う計画である。これで心字池が全く姿を消すわけでなく、昔なつかしい太鼓橋の向脇に蝶の羽をひろげた形で残り、池面積はせばめられるが以前よりも整備されて美し池になるであろうと大社では見ている。

工事は去る四月初旬から、内山緑地建設傘下永松商事の手で始められているが順序よく進捗しており、現在七分通りとの事である。

これより先、四月五日には松尾神社御遷宮が厳そかに行われ、同夕刻浄闇の中で御神体はお遷しされた。

社殿は、旧阿弥陀経石跡に移されて、以降同所に鎮祭される事になった。

又、清明殿前の三柱神社も近い将来、境内御垣内にお遷しされる事になると考えられている。

それから、これは境内整備工事とは一寸違うが、水源開発のことがある。四月一杯かかって田島山下の原貝取舎の山際をボーリングしたところ、相当の湧水量のあることが確められた。これによって、これ迄の水資源不足が解消する筈である。

（写真は埋立現場）

宗像談話室　花はいろいろ

映画監督の吉村公三郎氏が先日の読売新聞に、色盲の弁を書いていた。筆者も氏と同様に色盲で、氏が日常生活に不自由はなく色彩感覚に正常な働きが喪求する監督の仕事にも支障はないと言っているように、ひとく困惑差篋の経験もなかった。

いや、あった。平常の生活にはさしたる不便もないが、小学校の頃の野外写生と、中学一年の頃の陸軍幼年学校の受験とがあった。

紅緑色盲と知らぬ小学生は、春の野原を写して真っ赤に塗りつぶした。君の絵は火事場かと、先生は笑ったが色盲ではないかとの疑問は持たなかったらしい。やんちゃ坊主のいたづら位に片付けていたようである。当人はどうしてこの赤い絵具が、野草の自然の色とちがうのか腑に落ちぬまゝに過ぎた。幸と不幸がここに始った。

次は色盲の発見である。吉村監督は水玉のかたまりみたいな色盲検査表を、のろわしいと述べているが、筆者も切角の軍人志願に永久に決定的落第を宣告した検査表

玄海わかめ献上さる

―宗像七浦漁民の誠心をこめて―

陽春四月八日、昭和四十年の若布献上が行われた。郡内七浦漁民の熟誠のこめられた若布は前日、久保宮司、楠本権祢宜、漁業協同組合代表西地善蔵氏、天野貞助氏によって捧持され、宗像を出発。先ず博多駅で職員の厚いもてなしをうけ特急「あさかぜ」で東上した。翌朝車窓から見る朝日に輝く富士山の眺めに二行は、絶好の献上日和を喜びあった。午前九時三〇分東京駅着、直ちに出光興産内にある宗像神社復興期成会へ趣き、若布の容器その他に異状がいかと点検を行った。直ちに自動車で緑の新芽も明るいお堀端を坂下門より宮内庁へと参入した。先ず一行は宮内庁掌典部に於て徳大寺掌典長に献上御挨拶を述べ、第一応接室で徳川侍従に面会、久保宮司より若布献上の旨を申し上げ、宗像七浦漁業者の努力を詳しく説明した。かくして皇居での献上を完えた一行は東宮御所へ伺候した。途中近代建築が立ち並び高速道路の縦横にはり廻らされた東京の街を車は素朴な祈りを乗せて進んで行く。近代都市の繁栄と若布献上とは一見異質なものの様であるが根本に於て相通ずるものがある。何故ならば天孫奉助をかかげる宗像大社の精神は即ち国の繁栄へとつながるからである。

新装なった東宮御所で久保宮司が献上の記帳を行いその后応接室で、重田侍従に献上方を申し上げた。侍従は両殿下に言上のため旧殿より初春にかけての漁業の模様を詳しく漁協代表者より聴取された。かくして東宮御所を退出、ここからである。

現代の若布献上が、復興途上の宗像大社によって実現し、これが続けられて行く事に、大きな意義があると思われる。国運の進展かげには、この様な内的要素がますます充実されなければならない。

想えば献上若布のため本年初頭より怒涛逆巻く日も厳寒の冬の日も、ただ若布を育くみ育てた関係者の心中を思う時渾然と胸にせまり来るものがあったのである。

因に史書によれば皇室に対し奉る若布の献上は往古に於ては下関住吉神社、門司和布刈神社が行っていたが何時しか途絶えて今日では祭儀として和布刈祭が残っている。

かねて御病気療養中の安永渡平氏が、去る四月十一日急逝された。六十八歳とはいえ、まだくお元気で活動しておられたのに、突然の訃報は特に宗像に縁故ある人々を驚愕悲嘆させたことであろう。

安永氏は宗像郡の赤間御出身で、大正九年東大法科を卒業後八幡製鉄所に入られ、副所長常務に累進され、昭和三十一年八幡化学工業社長に就任、会長相談役を歴任、RKB毎日放送井筒屋等の重役をもつとめておられた。

八幡の御在住が長く、その間八幡宗像会長として郷土出身者の信望をあつめられ、製鉄所関係は勿論北九州市の実業人でも氏のお世話になった者は少なくない。それだけに、慈父の如く敬慕され、東京に移られてからも、会長辞任を見せられ、酒盃を傾けながら、後身の話を聞くことを楽しんでおられた。今年の新年総会は御静養中のため、遂にはじめて欠席され、一同を失望憂慮させたほどである。

八幡宗像会名誉会長 安永渡平氏を悼む

当大社久保宮司は海草献上のため四月七日から上京していたが、十日杉並区祐明町のお宅にお見舞申し上げた。応接室で約十分お目にかかり、大社の近況などお話しして、玄関までお見送りをうけて、辞去した。その翌朝、御逝去の電話をうけて、耳を疑ったほどである。翌十二日、お宅に長男義紹氏をはじめ、御遺族を弔問して遺影を拝し、斗酒を辞さぬ往年の酒豪ぶりを偲びつつ大人の風格に別辞を告げた。悉らく久保宮司が最後の見舞者となったことであろう。

ここに特に郷土のために、多大の業績を残された同氏の御冥福を祈り、謹んで哀悼の意を表する。

八幡大学〝海の家〟地鎮祭

去る四月七日、神湊に於いて、八幡大学海の家を建設するに当り当大社の同祭に地鎮祭を斎行した。

当日は、朝から小春日和の好天に恵まれ、紅白の幕を張り廻らした祭場には、八幡大学々長をはじめ、この工事に携わる奥村組の社長外関係者五十数名が参列した。

当大社から宮司二名が出向奉仕、午前十一時祭典開始、修祓、祝詞奏上の後、敷地清祓、地鎮の神事をし、次いで、関係者の玉串奉奠、盛大な中に無事祭典を終了した。

この建物は海岸に程近く、附近には松林があり、閑静な処である。鉄筋コンクリートのモダンな二階建てで、約二百四十坪、集容人員二百人位、この夏迄には完成させ学生等に大いに利用させたいとのこと。

NHKテレビで 沖の島を紹介

絶海の孤島、タブーの島、そして当社沖津宮の鎮座される沖の島が来る五月二十三日NHK全国ネット「自然のアルバム」で放送される。

沖の島の春は、一足早く三月初旬ともなれば、社務所前庭の椿の花も一輪二輪と開く。今や築港工事も、黒潮組の手に依って急ピッチに進められている。

淡い緑の中に、昨年末御屋根替された御社は、いま新たな装いで辺津宮、中津宮の大祭に引続いての現地大祭を待ち臨んでいる。

――――

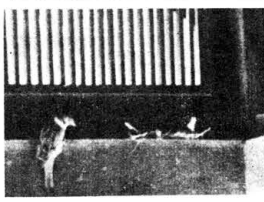
れた同社は斎行して以来、毎年春（四月）と秋（十月）に当大社から、宮司以下数名の職員が前日から参向し、奉仕しているものである。

〝小鳥の世界も新婚ブーム〟

春と云えば世をあげて新婚ブームである。小鳥の世界も今、新婚家庭で世の春を楽しんでいる。

しかし住宅難は人の世も小鳥の世界も同じ。否小鳥の住宅難は人の世以上らしく今年はとうく宗像大社々務所玄関の鴨居の上にまで巣を作りチャッカリと新家庭を営んでいる一組がある。

朝に夕に神主達を眼下に見てせっせとヒナに食物を運んでいる。ヒナの健康状態は非常によく元気なサエズリを聞かせてくれる。このヒナ達が親元を離れ自活の道を開く頃には水田の稲穂もさわやかと秋の豊作をつげる頃であろう。



宗像神社春季大祭 ―出光興産徳山製油所―

春も深まった去る四月五日、徳山市に在る出光興産徳山製油所の拡大な構内の一角に、宗像郡の総氏宮さながらに厳かに鎮り坐せ奉られる宗像神社恒例の春季大祭が当大社の司祭にて斎行された。

当日は、熊谷所長をはじめ、役員並びに社員多数が参列、当大社からは、前日から久保宮司、升谷権祢宜、城戸出仕、井上（朝）、花田両巫女が出向奉仕をした。

午前十時、祭典開始、修祓、祝詞奏上の後、浦安舞を奉納、次いで関係者が玉串奉奠、奏楽も厳かに鳴り響き、盛大な中に無事祭典を終了した。

なお、引続いて、同社大浦油槽所の高い丘の頂きに大浦の湾を見下る様に奉鎮されている宗像神社の春祭を奉仕した。

当製油所は、今日最も進歩した精製方式を採用し、各種の部面において我が国最初の特殊装置が施され最高度にオートメーション化された全くの近代的な工場である。

構内にはタンク、パイプ、ポンプが至るところにあり、その設備は最新式のものである。

また、至れ尽せりの清掃整頓のゆきとどき方は、石油工場とは全く思えない程である。

附記として、山と海との中間に在る同工場、明るく感じの良い緑地に囲まれ、筑紫の総本宮さながらに厳かに奉鎮されている宗像神社のお社は、総宮の三分の一に模造されたものである。

徳山製油所建設と同時に建立さ

町村往来

◇玄海町青年団幹部講習会…24日―25日、鎮国寺。団の運営や、二泊二日の研修と打ち合わせ

◇宗像町酪農組合総会…24日午前10時、農協東郷支所。新年度事業その他。

◇山田地蔵尊まつり…24日午後3時、増福院。

◇傷い軍人宗像支部総会…25日午前10時、玄海小南校舎（旧田島小40年度予算と事業計画。

◇津屋崎町議申大会…25日午前3時、青年研修所。

◇四塚山友の会…25日午前10時宗像高校山岳部室。同会は宗高山岳部と同OBで組織。新年度賞者…26日、隣保館で開催150人の中から入賞者決まった。

◇大島村赤ちゃんコンクール…30日午後1時―4時。大島村公民館。午後7時から同所で家族計画指導等。

◇宗像地区衛生組合結成の話し合い…30日、宗像町役場で開いた5校区から関係者が出席。町の地区衛生組合連合会の下部組織として区衛生組合、隣組単位に班を設け、班には隣組の全員を加入させることを決めた。5月中に組織づくりを終わり発足する。

◇宗像町青年団体育大会…2日午前9時半、中央中。ソフトボールに男女混合10チームが出場。

◇宗像町河東校区少年ソフトボール…2日午前9時、小学生5人、中学4人で12チーム出場観や一般総会、午後から役員総会

◇鎮国寺火わたり大護摩…28日午前10時、国宝鎮代わり不動開扉。午後1時、火わたり行事。

◇福間町赤ちゃんコンクール入賞者…26日、隣保館で開催150人

（四日本新聞より）

新築完成 ―玄海の味・生魚料理― みなと荘

宗像郡玄海町神湊
電話 神湊 五六番

宗像伝説 其の四十九 私学の先覚者 釜瀬新平

宗像名物教員と朋。ここに二つの物語がある。

明治七年の春、宗像郡朝町村（現宗像町朝町）の霊薬寺を仮校舎とする朝町小学校に一見貴公子然とした少年が入学した。農村人に似ず、どちらかといえばほっそりとした身体つきであった。この少年が隣村の野坂村から通って来る釜瀬新平であった。教師であった住坂の倉田徹達氏の感化薫陶はずばらしかった。はじめ余り目立たなかった新平少年は間もなく授業生（代用教員）となり、明治十五年小学校を卒業した。同年十一月、赤間町にあった宗像中学に入学し、漢学者川口校長の影響を受けた。明治二十年十二月、福岡県尋常師範学校に入学、同二十五年卒業。同時に一躍津屋崎尋常小学校長に任ぜられた。氏の教育経営の抱負は此の頃から培われて行ったと見ることができる。師範卒業、校長任命は破格である。乾坤一擲の勇猛心を奮い起した彼は、いよいよ校長業務にとりかかった。

教務の整理、教員の新調、校規の振興、校舎の増改築、補習科の設置、児童青年学級の新設、講演会開催、村内偉人の顕彰等、目まぐるしい活動が始まった。一年で郡内の注目を浴び、二年で郡内の優良校になった。

明治三十二年三月、母校である福岡県師範学校の嘱導拝命。四年間の副導生活中に児童心理学を研究し、地理模型の研究製作に頭角を現わした。在職中に発表した論説は

一、福岡県教育苦言　明治33年
二、小学校地理教育私見　同35年
三、福岡県地理のはなし　同36年

以上の三つで、これによっても彼の青年時代の教育に対する抱負を知ることができる。

拡充に次ぐ拡充が続いた。そして何度も物心両面に亘る困難を克服しなければならなかった。

氏は「私学擁護振興運動」に挺身した。県と国には前後七回の陳情請願等を行った。

昭和三年十一月十七日、彼の功績は畏くも上聞に達し、藍綬賞を下賜された。

私学育英の努力とその功を認めた彼は昭和五年二月二日、六十三才を以て逝去した。

現在、学校法人九州学園となった同校は、戦後の復興を立派になしとげて隆々と発展している。名誉校長斎瀬富太氏は新平氏の令弟、校長富士雄氏は新平氏の嗣子である。(H)

地理模型の権威者となった彼は、明治三十年十月二十九日、福岡市に行啓された皇太子殿下に九州地理模型を献上、御説明申し上げる光栄に浴した。同三十七年には鉄路易博覧会用大日本帝国交通模型を大阪商業会議所より依頼されて完成、三月渡米、七月帰朝した。

師範の訓導を辞した彼は「私立予習館」を創立した。範範入学生の準備教育のため、というのがその理由であった。実際は地理模型研究と公職勤務とが両立しないからであった。福岡市居人町集会所の二階を借りて教室とし荒戸三番町に寄宿舎兼模型工場を設けて発足した。四月十日、入学生は百二十名、新平氏とこの日は正に背水の陣であったが、館長の熱意と生徒らの熱望が期せずして合致した。翌三十七年には寄宿舎増設生徒数も四百名の盛況を見るに至った。同年再び渡米視察。三十九年四月には予習女子部を独立。四年制の福岡私立九州女学校を開設することとし、四十一年六月一日、私立九州高等女学校はここに誕生した。

宗像大社献詠 俳句作品集 (三)

子雀を遊ばせ松に親雀　津屋崎　毛利　夜潮

〃　井浦　良介

観潮撮るみどりの島に風生れて　〃　古部　河童

生命消えんとす青葉の雨しきり　〃　岩見佳代子

海よりの風に耐え日本の短き麦　〃　西住喜三郎

石仏の秘めし面輪や花曇り　〃　白石百合蔵

青む地へ丸めて捨つる鄙留紙　〃　鶴　美津男

雛ねむり湾上の月暈もてる　〃　安部真佐子

漬物石上げて芍薬芽ぐむ朝　〃　香立喜一郎

春ショール酔いれ紳士置き去りに　東郷　小野　淡坡

我が庵のあたらしランド入学す　〃　小野　花居

げんげ畑放牧遊ぶおちこちに　厚　狭　篠田　南洞

春夜雨驟潮と寄す大吠岬　吉　留　菱　花

遠く来し友に春愁吹きとぼす

日立と共に五十年 (十)

倉田主税会長の半生記

年末、主税は軍隊から帰郷してきりしており、正しいもの、清いもの、あたたかいものに対しては無条件で感激した。尊敬する小平から〝とくに君を適任と信じて任するぞ〟と言われたとき、主税は全身がおののくような気がした。

郷里にあった。そこに小平から電報を受取った。〝新規の計画あり、すぐ帰れ〟というのだ。彼は即刻帰社した。早速、最高幹部の一人、高尾に呼ばれた。「早速だが君に大任を命じる」と言って高尾は〝これから電線自給の大方針を実行するについて、是非ともお前に協力して欲しい〟と言うことを懇々と説明した。そして〝小平さんのところへ挨拶に行くように〟と言葉した。行ってみると、小平は高尾が言ったことと同じことを繰返して言うのであった。「こういう次第だ。しっかり頼みます」小平は、こう言って主税の顔を凝視した。信頼の眼である。

「ほかに沢山の職員がいる。帝大の秀才がいる。高工生の同僚もずいぶん多くなっている。それなのにこの自分を見込んで下さった」そう考えると彼の感激は、そのまま小平に対する感謝となり、又、ひるがえって自分自身に対する重大なる責任感を呼び起こすのであった。「どんなことがあっても、この仕事をやりとげなければならない。よし全力を尽してやるぞ」とっさに決心ができた。然し、小平に挨拶して自分の職場に戻る途中、早くも彼の胸中に、もくもくと不安の雲が広がった。「俺は電線について何一つ知っていない。金の素人だ。果してこの大任を全うすることが出来るだろうか」極めてもとも不安である。人間誰しも、こういう立場に立てば心配するのが当然である。小平の命令を聞いた時の感激が大きければ大きい程主税の不安は大きかった。小平に対する感謝の気持が強ければ強い程、主税の心配は濃かったのである。然し、職場に戻り、部下たちの働いている姿を見たとき、すでに彼は泰然としていた。少なくとも、はたから見ればいささかの変りもない、いつもの通りの彼であった。

〝為せば成る、為さねば成らぬ何

事も、成らぬは人の為さぬなりけり〟精神一到何事か成らざらん〟これら一連の字句について真剣に思い当ったのは、小平から銅線づくりの仕事を託されたときである。生まれてはじめて真剣に考えさせられたのである。失敗もあるだろう。いや必らず失敗する。一度や二度ではあるまい。恐らく失敗の連続となるであろう。仕方のないことだ。研究を重ね実験を積んで行こうに、必らず成功することができるのだ。

主税は、そう覚悟すると全身にもりもり力がみふれて来るのを感じた。それは、まさに新しい職場に向って馬を走らせようとする若武者の、雄々しくたくましい武者ぶるいにも似たものであった。

大任を負わされた主税は、勇気を出して成功に邁進することになった。然し、その道は、はるかに険しかった。最初の難関は銅線をつくる機械をつくることであった。製作機くらい既製のものを買ったらよかろう――と思うのが普通である。ところが日立製作所はそうでないのだ。いや、小平の主義がそれを許さないのだ。何から何まで自分たちの手でやるというのが彼の主張なのである。〝無から有を生む〟という言葉は、やっぱりである。文献を探しても、おいそれと見つかるものではなかった。〝学燈〟という外国書案内を毎号取り寄せ、目ぼしい本が見かるとすぐ註文して取り寄せた。

取敵えず電動機の設計にとりかかったが、これは日立製作所の得意とする仕事であるから、別段の苦労はなかった。然し延長機はそうは行かない。今迄にそういうものを作ったことがないので設計の出来る人が見当たらないのである。それでも〝なんとかしてみよう〟というので、いろいろ努力してみた。こうして回り道をしながらも、電線事業創業への準備はすすめられて行き、翌大正七年の三月には実際の仕事を始めるところまで漕ぎつけた。ところが職工を集めなければならないのだ。工場の職工たちでは技術的に未経験なので、どうしてもその職工を引き抜いて来なければならないのだ。いいの悪いのというところで、新しい工場が発足するときは、そういうことは避けれないのである。最少限度必要な職工は集めることが出来、三月十三日には腐線から細線引落しの練習を始め、四月二日に線巻用絹糸の調査を始めたのである。然し、試作品が出るまでの苦心は一通りのものでなかった。技術的な難かしさは勿論のこと、寄せ集めの職工たちは、なかなか気分が一致せず、つまらないことですぐに騒動を起こす始末である。これには主税も長歎息をして〝ああ、人事というものはむづかしい〟と、人知れずひとりごとを言うことがあった。心ばかりあせっても、肝心の実績は遅々として挙がらなかった。頭を痛めている主税の耳に、よくないニュースがはいって来た。「古河電工では、日立製作所に対する電線の供給をストップするかも知れない」そういう内容なのだ。若しそれが本当としたら、製作所の仕事はお手あげである。愈々銅線工場の責任は重大である」必死になって部下を督励し、主税自身もいろいろ手を出して率先垂範の実を示したのである。五月の終りには、漸く据えつけた機械が運転を始めた。然し、動かしてみるとすぐに故障が起き、それを苦心して修理すると、まもなく別の故障が出るという有様である。六月の初めに溝付圧延機の組み立てに着手したが、終る迄に約一カ月近くかかり月末になってしまった。「七月を期して試作を始められた」そういう高尾からの指示である。「倉田君、大変だろうが一つ頑張ってくれ給え」小平自身も、わざわざ見回って来て、主税を激励するのである。昼夜兼行で主税は頑張った。朝早く家を出て、夜遅く帰るので、可愛いい我が子の眼をさましている姿を見るチャスもなかった。

〝七月を期して〟と言われた以上、万難を排してそれを実行しなければならない。工場は軍隊ではないし、七月一日早々という特別の指示はないのであるが、責任者として主税は〝どうするべきか〟と一日一日〟と、心に期していたのである。然し、いくら努力しても、出来ないときは出来ないのだ。機械の具合が悪いのをなおしているうちに、一週間ばかり経ってしまった。

(文責　襄次　守)

あゝ常陸丸 (十)

常陸丸殉難者の碑

常陸丸殉難者の霊を慰めるべく、東京青山の墓地の一角には立派な殉難者墓及び石碑が建設され、森山亀太郎氏は今日もなお慰霊祭が営まれている。

碑の表面にはこう誌されている。

常陸丸殉難墓碑再建之由来

本墓碑は元明治三十七年八月建設セシ所ナルガ大正十二年九月関東大震災ノ為倒壊シ一時近衛工兵大隊ニヨリ応急修繕ヲ施セシガ大正十五年近衛歩兵第一聯隊長陸軍歩兵大佐井上環同副官陸軍歩兵少佐山田鉄二郎並遺族有志ノ発起ニ依リ再建ヲ尽シ在来ノ墓碑石ヲ墓碑台トナシ、新ニ墓碑ヲ作リ昭和一年六月十五日竣工遺族生存者当時ノ戦役関係者近衛歩兵第一聯隊将校団員同准士官下士兵卒代表者日本郵船会社々員外一般有志参列ノ上再建記念祭典ヲ実行ス玆ニ本碑再建ノ由来ヲ誌ス

裏面には

昭和三年六月十五日

近衛歩兵第一聯隊

竹本与三郎　梨本庄之助　東　勘三郎　森井啓太郎　小谷勇三郎　藤原久四郎　白砂松二郎　以上三十七名。

松田辰之助　江副　初蔵　井上　久吉　川上藤一郎　雪原治太郎　川嶋辰次郎　森田　伍一　藤崎　虎吉

小林嘉藤治　山内儀三郎　横山　友吉　山本富三郎　藤田新之助　森山亀太郎　江松　亀吉　早瀬太次郎　高岡九一郎

このように見えている。

なお、墓は鳥居を前面に据えた立派なもので、表面には「常陸丸殉難近衛後備隊将兵之墓」と彫り込まれている。裏面には上部に「壮烈碑」と書き、続いてその建立趣旨を、下部には殉難者の名簿が彫まれている。「明治三十七年八月二十日建之」とあるから遭難直後建されたことがわかる。当時の国民にとって大きな精神的衝撃を与えていたことが知られよう。

日本海海戦記念碑

福岡県宗像郡津屋崎町の渡半島には本海海戦を記念した記念公園がある。「東郷公園」とも称している。

この小高い半島は玄界灘に突き出ているため、当時は陸軍の監視哨が設けられ、その記念碑が建てられている。表面には

「陸軍監視哨之跡　東郷平八郎」

とあり、側面には

「津屋崎監視哨は士官一名兵卒九名より成り明治三十七年二月七日開設し平和克復と同時に閉鎖せり陸軍大将森岡守成書」

と誌されている。さらに裏面には

「海戦当時の心を以て分を為さば国家の興隆期而可俟矣」

また別の側面には

「大正十五年三月四日財団法人日本海々戦陳蹟保存会設立記念之為建立之」

とある。晴れた日には北方五十粁余離れた日本海海戦の古蹟「神島沖ノ島」が遥望される絶好の場所である。この場所に、大正十二年

年の頃、東郷元帥を招いて大祝賀会を催したものらしく、その時を期して「東郷公園」を造成したと思われる。東郷元帥の筆になる「日本海海戦記念碑」がある。傍らに元帥の野立ての足跡が花崗岩に刻んであり、記念碑の両袖にあたる部分には丸い銅版がはめ込まれている。有名な「興国興廃云々」の名文が鋳込まれてある。碑文の真下、今のべた二つの丸銅版の中央には此の所を記念する文章が四角い銅版に鋳込まれている。中に「天皇聖威所致、又賞我将士忠勇奮戦云々」「大正十二年三月」

とあり、当時の総理大臣海軍大将男爵加藤友之助撰、海軍中将佐藤健太郎書とある。

(以下次号)

宗像郷土館の収蔵物引き取り決定

昭和の初頭、当時宗像学校長であった田中幸夫氏は、郡内の各地から多数の古代資料を蒐集していた。これら数千年来の貴重な遺物を収蔵展観するために、郡及び全国各地の有志の協力によって昭和十三年十二月五日、一宗像郷土館」が建設せられた。郷土館の所管となり、近時は中央中学校管理となっていたが、数年前同校が移転し、また建物が腐朽等の為保存が難しくなった。最近、同敷地が八幡製鉄に売却されたのを機会に、郡町村長会事務局との間に話が纏って、同館収蔵品を宗像大社が引き取り、適当な管理段を講ずることになったものである。

(一頁よりつゞく)

吉　田　占部　由久

ふるさとの釣川堤土筆摘む児等の影見え春めきつらむ　香　椎　桜井　秀

作業衣のくたびれたるが朝の眼に痛くは見えず草の道来て　〃　桜井　ツ子

若き夫婦の網棚より音いろこぼしつゝ玩具がバスの弾むたび鳴る　深　田　中野　節子

出勤の夫にたすけられリヤカーを引き行く野路にをを箱白し　田　島　力丸　登

庭の木は新芽ぶくらみ春近し彼は冬着で春まだ遠し（入院中の弟見舞）　吉　留　松本はぎの

学大の宅地造成終りしかブルトーザーの音絶えて久しき　武　丸　立石　昇

雨降縁れば煙笛鳴らして入れて来る一番渡船先づ視野に入る（島の宿にて）　武　丸　立石ろせの

稲妻は一瞬庭を照らし出し間をおきて遠き春雷の音　大　井　安部　重郎

一郡の母の大川水温む流れ豊かに民を育くむ　〃　安部　静子

春浅く幾年ぶりに会ひし友昔のごとく若くうるはし　〃　吉田　杏子

首かしげ杏を見つめるカナリヤの黄色の翅に春の陽は満つ　戸　畑　山磨　昌子

ねずみのかじる音きえ一つのーズムとなりて夜半覚めし声が心なぐさむ　原　町　中村　幸

目だまりの庭に遊べる雀の声風邪に寝てるてきけば楽しき　武　高　山徳七郎

吹く風もほゝえあたりて温かく椿の花に早や蜂の来て

我楽苦多告知板

○やわらかあいムードで行こうということになった。

「あのう、恐れ入りますが、あれはどうなっていたんざあましょうかしら」

「はい、それはでございますねえ、こうなっていたんざあますのよ。お分りになりまして？」

歯が浮いて来た。

○事務室に正確な電池時計が取り付けられた。これ迄のネジ巻き式はクタビレていたので、少し不正確だった。若い人等のぼやくこと、「これ迄なら遅刻しても早退しても、古時計のせいにできたのになあ、この正確な時計は困る！」

○B君、珍らしく申し出た。「あのう、床屋へ行かして下さいませんか」

「よかろう、神職として身だしなみを重んずるのは大いに結構」

すると他の連中

「よく床屋へ行く気になったものだなあ」

「ありでもお酒落っ気があると見える、いじらしいじゃないか」

「変りばえもしないくせに！」

○午後三時頃、T君が鮨屋の真似をはじめた。

「こう握って、ワサビを利かしてトロを乗せる。醤油をつけてパクリ、うーん、これはうまい」

身ぶり、手ぶりが堂に入っている。

「大変上手だ」

見ていた一同「ゴクリ」

○英語で結婚式の司会をやろうじゃないかと提案した御仁がある。

ノリト、エブリボディ　スタンダップ・ブリーズ・ボウ

なんだかおかしいね、で取りやめ